

ゴルフの神様

北海道大学医師会
北海道整形外科記念病院

こんどう まこと
近藤 真

2015. 2. 28. 札幌ドームで医局野球決勝の試合があった。

我が整形外科チームはエースが6回1アウトまでノーヒットノーランの快投を演じていた。

バッターが1塁側にファウルフライを打ち上げたので、1塁の守備についていた私は「よし、これを取ればあと一人でノーヒットノーラン達成だ」と瞬時に考え、打球方向に走り出した。はずだったところが、後ろから左下腿にボールが当たった（経験者によくわかると思いますが）感じがすると同時にその場に倒れていたのだ。「これが患者さんから良く聞くアキレス腱断裂の瞬間だ！」と理解した。幸い、翌日自分の病院ですぐに同期の麻酔医に麻酔をかけてもらい、同期の下肢のスペシャリストに手術してもらえた。全麻ではあったが、その日帰宅させてもらった。

翌日から手術も5件ほどこなして足がパンパンに腫れるというおまけはついたが、術後6ヵ月で主治医からゴルフ再開を許可され、復帰後2ラウンド目、まだ恐る恐るのラウンドであった。127ヤードのショートホール、ややフォローの風。普段の自分なら迷わずpitching wedgeを握っていただろうが、100切りが危うい状況であったため謙虚に9Iを持ったのであった。ただ一つの救いはその日short holeだけはすべてパーオンしていたことであった。フェーダーである私はゆっくりswingすることだけを心掛けてピンのやや左を狙い8割の力で打った。芯を食った時というのはご存じの通り手応えのないものである。まさにその通りであり、狙い通りの方向に飛んで行ったボールはややピン奥に落下した。「やはり少し大きかったか、まあ何とかパーは拾えそうだ」と思った瞬間、（珍しく）バックスピンがかかり戻り始めたボールがなんとカップにそのまま吸い込まれていったではありませんか。半年もゴルフをすることができなかった私を憐れんだゴルフの神様からのプレゼントを謹んで受け取らせていただきました。厄年かと思っておりましたが、それまでの不幸を一気に払拭してくれた出来事でした。

惜しむらくはその年に書き換えのあったホールインワン保険を妻の言うがままに最低額に減額していたために、小さな懐から大きな持ち出しが生じたことである。

さて、学生時代から長年腰痛に悩まされていたが下肢痛はなかった私に2021年ついに下肢痛が加わるようになり、徐々に間欠跛行も加わりどんどん悪化した（典型的な腰部脊柱管狭窄症の症状）ため、ついに7月にこれも自分の病院で信頼する脊椎のスペシャリストに手術してもらった。6年ぶりの手術であったが、何故か2度とも自分の専攻科である整形外科の手術になった。術後経過は順調で1週間後から外来診療を再開、2週間後から手術も再開できた。術後2ヵ月で主治医からゴルフ再開を許可された。復帰2ラウンド目、「あれ、前にもこういうことあったな。術後ゴルフ再開2ラウンド目。もしかして今日もまたホールインワン出るんじゃないかな？」と、二匹目のドジョウを狙いましたが、ワンオンさえしない一日でした。

ゴルフの神様、ホールインワンは一度で結構です。また、手術は執刀するだけで、執刀されるのはもう結構です。

五感とその減失

札幌市医師会
札幌平岡病院

はまじま いずみ
浜島 泉

新型コロナウイルス感染症の症状の一部として、嗅覚障害と味覚障害が指摘された。この機会に感覚について、振り返ってみたい。

五感という言葉があり、視覚、知覚、聴覚、嗅覚、味覚がこれに当たる。視覚は後頭葉、知覚は頭頂葉、聴覚は側頭葉、嗅覚は前頭葉に首座（感覚中枢）がある。味覚はどこ。視床下部または海馬にあるとも、まだ確定しないとも言われている。

視覚は部分的視野欠損と全視野の障害（失明、全盲）、視力低下など量的な変化や、近視、老眼、斜視、複視のほかには色覚障害（色盲）がある。「見る」には、視覚に入ってくるだけでなく、観察の意味合いもある。動体視力、死角（動体視野狭窄）などという概念もある。バリアフリー、盲導犬などにより、視覚障害者の行動範囲の拡大と安全性が改善した。

知覚は、痛覚、触覚、温痛覚、圧覚などに分けられており、延髄や脊髄や末梢神経など伝導路の障害でも差が出る。「寒い」と「冷たい」の違いもある。私はウォレンベルグ症候群により、足に温痛覚障害があって、ある時、バスの暖房で火傷しそうになったことがあるが、近年は警告が掲示されている。傾斜、振動、波動、加速度にも特殊な感覚が働き、船員や宇宙飛行士などのように、鍛錬効果もあるという。

聴覚は音感であるが、先天性聴覚障害、聴覚器障害（中耳炎など）、全ろう（皮質ろう）、加齢性障害、騒音性難聴など。絶対音感と言う言葉もある通り、単純ではない。「聞く」と「聴く」にはニュアンスの違いがある。聴失者に振動で音楽を感じてもらおう機器の開発をしている技術者がいる。携帯電話の普及で聴失者の通信力が向上した。このような福祉の取り組みが進んでほしい。

嗅覚には芳香と異臭がある。いい香りと厭な匂いとに分けられる。主観による分け方なのだと思うが、相当の共感を得られる分類のようだ。花木や菓子や料理が発する「芳しい香り」と、過加熱の「こげ臭い匂い」や、腐ったものや消化されたものが発する「臭（くさ）い匂い」に分類して言う。発酵のクサヤ、樹木でもクサギなどというのは、嫌われてつけられた名前だと思う。栗の花やナギナタコウジュ、銀杏なども後者に入るようだ。「馨る」というものもある。実際の匂いとは異なるが、「風薫る季節」などというのものもある。「色香を漂わす」ということばもあるが、色と香りを合わせただけでなく、言外の意味（女性の美しい姿・顔立ち）を含んで古来から用いられているようだ。

味覚は、主なものは甘酸醜苦辛の五味であるが、辛に代えて、うま味を上げる人もあり、複雑である。香味を伴ったメニューというのも、素晴らしい文化だと思う。

味覚とは異なるが、噛み応え（食感）、口当たりなどというのもあって、飲食の楽しみの一つになっている。これも感覚として扱ってよいし、食文化の中で充実してゆく価値があると思う。

このほかに三重苦とか、第六感、違和感、幻覚、孤独感などという言葉もある。治療の対象にならないものも多いので、お年寄りや、障害、疾病を持つ人や、一人暮らしの人へは、公私の配慮による優しい心遣いが、充たされるように望む。